小詩園

薰園作

新潮社藏版

新潮社藏版

小詩國

薰園作

小詩國

金子薰園作

あめつちはたゞわがために
ちひさなれ小さき榮(はえ)は神の
たまものの

小詩國のはじめに

薫園

目次

花瓶……一
歡樂……七
素香……一一
聖壇……一七
紅詩箋……二二
綠衣……二八
森かげ……三四
萩小徑……三九

青蘆……四五
落木……五〇
白菊……五五
冷扉……六〇
おもひで……七〇
かへりみ……八二
附錄 小紅集……武山英子作

表紙及び包紙の意匠は、畵伯和田英作氏の考案に成れり。氏が、忙中、特に、予がこの詩巻の爲めに、執筆せられたる勞は、予のふかく感謝するところなり。

又、口繪なる「詩神」は、畵伯岡田三郎助氏が、先年歸朝の途次、印度洋上にて描かれし理想畵なり。氏は、その未成なる故を以て、固辭せられしが、予は、この作に對して、感興をおぼゆること、尠からねば、強ひて乞ひて、巻首を飾る事とせり。（著者）

小詩國

金子薫園

花瓶

瓶にさしてつくづく見れど紅梅は姫
ともならでさびしきよ春

くれなゐの花にうもるゝ眞珠島小さ
き女王に歌を敎へし

月くらき瑞樹のかげにそとよれば衣
につめたき大理石像

紅き白きうすもものつけし兒らが笑み
と涼しうそよぐ朝鳳仙花

かへり咲きて瓶に去をれし白薔薇戀
の詩室はたゞ冷えまさる

菅笠に菜の花ゐがく興そゞろ木曾の
春日は欄にながれて

うすぎぬに光つゝめる紅玉の花とう
まれてさむし寒牡丹

つめたきはわが天地(あめつち)と庭の隅に春を
すねたる水仙の花

詩に痩せし三人をめぐる夏花の白き
にゆらぐ夕ぐれの香や（さる花園にて）

默想の興ふけゆきて萩の雨芙蓉の雨
とわが耳に入る（ひと夜）

あけぼのゝ夏のゆめ野をあくがれし

わが詩の靈かつゆ草の花

梅が香に朝月うづく草川や水のけむ
りの夢とたゞよふ

卯の花のかきねぬらして雨すぎした
そがれでろを訪ふ人のこゑ

衣ずれは定家や次にうかゞへるこゝ
は新詩に興たかき宵（新派かるた會席上）

歡樂

秋風の秋を讃ずる野はくれて今歡樂
の月わきのぼる
妹のとすればつくる片頬笑みわかき
聖母の世を今見るか

わが歌に姫の千人が舞ひいでゝ春の
御殿を現ずれば足る

詩にはえむのぞみの花は野にみてり
歌の二人に月高う照れ

朝の欄にさゝやきてよる海鳥のつば
さにゆるゝ君が黒髪

われとわがよわき心を嘲りぬ牡丹く
づるゝともし火の前

玻璃の窓雪夜にあけてとひよりし鹿
に餌をやる人うつくしき

水仙の精よといひてきえゆきし夢の
香さむきたら衣のかげ

夕日あびて高くたちたる向日葵をた
だ何となくうち仰き見し

摘みてはすて棄てゝはつみて春の草
春の童子の手籠にみちぬ（新詩歌集の初めに）

素香

寒燈はうすれてきえて水仙の花の香
さむう人夢に入る

山茶花に草堂の冬かざらせてにほひ
つめたき寒菊の花

低う曳く山羊(やぎ)の乳賣る笛の音やみど
り遠野の朝あけの空

何の野ぞたてるは君と二人なり今渾(こん)
沌の夜はあけむとす

その底にふかきさとしのこもるやと
ゆふべ泉に耳かたぶけぬ

なにごとか夢に夢見てさめし夜をお
ぼつかなしや後夜の鐘鳴る

繪ぎぬのべてけさ黙想の興もあらむ
訪はですぎむか棟(あふち)ちる門

逍遙のあした草野の露ふみて詩の興
何の花にあふるゝ(郷にかへりし友に)

花かざしまねく白衣のかげ見えて島
の月夜をわが船おそき

奇しき香の春を薫じてあたゝかき君
が畫堂にたえし琴鳴る（某畫家の再婚せるに）

わが剪りてわがまゐらする水仙の花
の異香に靈ぢのばしむ（なき祖母の百ケ日の朝）

白百合をつぼみながらにいけし夜の
寐ざめに高き花のにほひや

春あさき京の御堂の梅の朝くろ髪さ
むし經うつす人

花させば花は萎みぬ女樂師のかたみ
花がめ瑠璃色ふりぬ

詩の國の野のあけぼのにおひいでし
春のわか草夢あたゝかき（春風會諸子の詩集の初めに）

聖壇

石彫の天女母かと仰ぎ見ぬ聖壇くだ
る宵うす月夜
花野までとおぼろの月にいでしより
わが思ふ君はかへらずなりし

愁人の夢をめぐりて茅屋ちかうきら
鶴啼くよ朝松の林

うるはしきかの彩雲のとばり透きて
ふと見し光わが詩にはえよ

ひまもりてゆふべの星もおちぬべく
葡萄の葉かげをぐらうなりぬ

銅瓶にうす紅椿いけて見ればわかや

ぎますよ白衣観音

花かげにわが吹く笛は春の曲美き音
と鳥のまたつどひよる

虫の音にきえしおもひのふとわきて
夕月野みち歌によろしき

わが眼(まなこ)ゑひよとばかり黄金箭のみだれ眩うわが前に落つ

膠山絹海帖とて、今の世の名だゝる詩人畫家より心こめし小品を乞ひえて、一巻となせる書畫帖の後に

天(あめ)の國のにほひみなぎる繪の花野詩(しい)歌(か)の鳥のてゑほがらけき

不斷の音と詩歌はひゞき常(とこ)花(ばな)と繪畫

ははゆる わが春の國

紅詩箋

紅詩箋ゆらめく見えて人はあらず蔽
ふわか葉の香に淡き縁

あたゝかう春日ながるゝ玻璃の扉に
今成りし繪のうつくしき榮

ゆふ雲のくれなゐひたす靈の彩海の

女神が手は今君に（某畫伯の海を描ける傍にて）

かへり咲きの櫻ちひさき花瓶に小春
の日かげ斜にさしぬ

歌はむに美き名哈爾賓乞ふべくは歌
の都と奏させたまへ

迫りくるうす靄薔薇のにほひあり君
が御手とる野の夕月夜

一とせを奏でふるしゝうたの樂よき
音生れむ新しき譜に（新年の作に）

うらゝけき春の日影にわすれたるむ
かしの榮華を呼ぶか鶯

うぐひすに紅梅の衣よそはせて今日
の日和に誰を訪はせむ

うつくしう紅葉ちりしく小笹道君に
遇はむの途ならなくに

ほがらほがら朝の鳥なく野に立ちて
詩に新しき光をえたり

ふと見しは理想の國の春の日にローレルかざすうす花少女

君が繪に靈えたまひし姫神のもろ手の紅玉御子とや生れし（某畫家の双女兒を擧げしよろこびに）

香焚きて童子さぶらふ天堂に君がみふみを讀むと見てさめぬ（友の文集のはじめに）

山茶花にゆふ雨さむき小縁さきぬれてよりくる鳥もさびしや（なき祖母の上懷ひつゞけゝる夕）

御叱りのみてゐはいまだきこえずや二十年この子竟に榮なき（母の御墓にて）

緑衣

夏の皇子(みこ)がみどりの御衣(みけし)そよがせて
吹く笛の音か野の朝の聲

紅き花を君が戎衣の裏に秘めしをん
な心をあはれとおぼせ

小(ち)さかりしうつくしかりし君が世と
ねたうや思はむ露草の花（人のをさな兒を失へるに）

伊太利の精舍の壁にひんがしのわか
き詩人の筆ゆるしませ

花かざす島の少女が黒髪をましろき
衣(きぬ)をなぶる春風

花草の夢の香ふくるそよ風よ君低唱
の詩もつたへずや（人のもとに）

朝さむきおち葉の庭に何のはえぞ紅
の香たかき一輪うばら

ラフアエルの聖像あかう扉にさして
雪夜はえあり君が畫室（アトリエ）

わがおもひのせし小舟のまた消えて
詩歌（しいか）の海はとはにまばゆき

聖燭（みあかし）にはゆる黄金の詩の冠冠小（ち）さう
てわれにふさはぬ（戯れに）

夢ながら甘き香かぎて笑む君にさゝ
やきて見よ木犀の花

初秋の詩興あらたなる夕月夜凭るに
おばしま談るに君あり

詩の國の新年うたふあけぼのに希望(のぞみ)
の雲のわくやくれなゐ

封じたる春の歌反古封とけて新草も
えぬ紅き花さきぬ

君が胸に挿せる一輪これやこの花の
巴里の彩濃き花か（某畫家の歸朝を迎へて）

森かげ

森かげにあわたゞしげの落葉やつめたき肩にまたみだれくる

詩に會せず春の雨夜はくだちたり瓶の丁子の香もくだちたり

世にすねて草の戸とざす角筈や君が繪に似しあぢさゐ小道

光明の母へと一つ舟は見えて失意の子らに岸はくれゆく

師もまさず祖母もまさぬ新年のさびしき榮と歌よ幸あれ

ふくみては含めるまゝにさと吐きつ
病の味はあゝ苦きもの（病中）

夕日おびて銀杏ちりくる堂の縁わが
觀念の膝かろうなりぬ

あけぼのゝにほひ新なるわか葉かげ
小鳥が夢の香もてもるべし

血にあきし惡魔の異形野にみちて笑
ふをきけよ叫ぶをきけよ

樂堂に「寂寥」の曲たづみてはゆふべ楡の葉窓にみだるゝ

なぐさめの音をもたらして惱みある
秋の小窓にさゝやくや何（友の詩集のはしに）

新年はましろき花とふる年のふりし
わが歌みなおほひぬる
朝雲に祈るわが歌ひゞき高し君をほ
まれの旅にやるあした（久保醫學士の渡歐を送りて）

萩小徑

祖母君の一週忌に

萩小徑ふむに露けき朝あけや祖母の
墓に秋はめぐりぬ
「懷舊」はいかなる神の詩の卷か繰るに
あやしう胸ふたがるゝ

御墓扉によりて仰げば夕づゝの愁ひ
にうるむわが眼ににぶき
一人ならぬ世ぞとおぼして笑みませ
る祖父の君に秋なめぐりそ
一とせのうれひ悲しみ語らむに汝は
やさしき露おびし萩

祖母君の新盆に

焚けどたけど苧殻のけぶり君をのせ
ず孫の二人に夜はたゞふけぬ
なき人の來ます宵よと門にたてば裾
にまつはる水ひきの花
せめてこのおばしま近く降りませ君

み迎ひの歌は成りにき

御駕(みくるま)の音かと耳をかたぶけて萩のそよぎも胸やすからぬ

露にぬめる燈籠の灯(ひ)の影おちて待ちしのぞみの光もきえぬ

○

萩芙蓉ゆふ日にやせし御墓道師が御名呼ばゞいらへまさむか

あたゝかき潮とわきておもひでは師がます國へあくがれしむる

まぼろしの影趁ひゆけば夕やみに萩の花ちる師が御墓道

松もたてぞこの新年のこもり居よわ
かき生命の榮はうする丶（師の喪中、新年を迎へて）

○

かなしみも愁ひも君がおん袖におほ
はれし世と覺りえし今
待ちわぶるわれには長き百年か君が
かへさの道よふりたり（二首、師が一とせの御忌に）

青蘆

青あしのそよぎに朝の思ひゆれて歌
を生みゆく行々子のこゑ
ゑろがねの小さき聖像にやまとめき
て水仙いけぬクリスマスの朝

いくさはてゝ煙さまよふ野の夕きら
めく星は何の啓示ぞ

ほゝゑみてうまごの歌や待ちませる
御墓をめぐる連翹の花（祖母の御墓にて）

さすらひのわが世の旅の夕野みち袖
にちりくる花ほのじろき

夜の神の長うひきますうすぎぬにふ
れてこぼるゝしら玉椿

○

月の宴月なくふけてほのぐらき燭を
のゝくさら萩の雨

君が繪に入ればことごと生命えて歌

ふ蟲ありそよぐ草あり

吟せむに月なき宵のさびしさよ燭か

きたてゝ君が繪を見む（三首、月令會にて）

○

君がゆくへとひても見ましあけやら

ぬ磯の松原鶴のこゑする

うす月夜樂の音する花の野に白き被（かつ）

衣のほの見えし夢

繪姿の見る見る生きてかぐはしき御

袖こぼるゝ天の花びら（薄氷遺稿の末なるなき君をしのべる諸家の歌の後に）

落木

牛小屋に木の葉みだれて牛鳴きてミレが繪に似る夕げしきかな（雜司ヶ谷にて）

ひとり行く道はゆふ山風さむし小春の野べは君と行く道

默想の隱者もつひに山を出でゝふゆべゆふべは人の戀しき

末枯やゆふ日さびたる墓原にほうけてたてり鷄頭の花

闇の手にふれてをのゝく野の鳥の夢あたゝめむわが歌もがな

南歐の日かげあたゝかき野を戀ひて
西行く雲に思ひ寄せしか

春の日や森閑とせる大寺にをりをり
しきる遠音うぐひす

君が餘威ふくか朝かぜ秋さびし胡地
の新墳松高う鳴る

道のべの野薔薇の花の香を嗅ぐにわ
が世の旅のさびしくもあらず

舟うけて笛ふきめぐる春の沼岸のさ
くらのをりをりちりぬ

仰ぎ見れどたゞよのつねの光のみ君
が慈眼に似し星もなき（なき師の御上をしのびて）

あたゝかき祖父祖母のふところに二
十五年の夢やすかりし（小照の裏にかきし）
きゝと啼きて鵙飛びたちし晝の窓に
はらりはらりちる山茶花のはな

白菊

大輪の白きかざして舞はむ人ひとり
はほしきこの菊の宴
白菊の冠あらたなる七人に歌の世紀
はまた新なれ（三首、白菊會一週年の紀念に）

われらにと賜びし聖旨のおふけなや
天の香てもるしら菊の花（白菊會をむすびしとき）

菊の香に君が繪筆の香もそひてわが
繪姿のわれならぬ思

詩の國の春のはじめの朝ぼらけ召さ
れて君と行くか大宮

わが思ひおもひおもひの花と咲きて
君凱旋のあした飾れよ（女に代りて）

聖堂をめぐる白鳥ましろ羽に御光あ
ひて十字をめぐる

ゆふ日淡き秋の花野をさまよひて桔
梗にねむる蝶さましつる

清談の二人にちかき縁の上に秋を興
ずる月夜こほろぎ

あかあかと夕日をうけて兀山のひよ
ろひよろ松の一もと高き

君が繪のあらばと思ふ檜木笠檜の香
高きもさびしからずや（半古ぬしの、木曾よりかへり
て、檜木笠を贈られたるに）

夜の神の御髪すべりしかざしかや霜
にこぼれし山茶花のはな

鹿の角雨戸にふるゝ雨の夜を山下い
ほにひとり詩をおもふ

冷扉

死の宮の冷扉(ひえど)あけます御手にすがり
母よと泣きて呼ぶすべ知らぬ
怪禽の叫びとだえし野の闇にわが寂(さび)
寥(しみ)の歌かへりみる

ゆふ山に今木がらしの音たえてふも
との寺か鐘低う鳴る
森の神うた召すらしき夜のそよぎ二
たびきかばこたへましもの
詩に生きて詩に死なむ身をうれしと
もさびしとも觀てわが世すぐさむ

誰が愁ひのせしおち葉か野の小徑(こみち)一
足ごとにおもひ亂るゝ

萩の家先生の御遺骸の前に
通夜して

やすらかにねぶる御相(みさう)のあなたふと
わが師といはじ歌の御神よ

君が歌に生れしわれや野の小鳥なに
たのしまむ君が歌なしに
かへりみて歌を召すべき御供(みとも)にと天
の花野にわれおぼすらむ
歌の母ふみの父ぞとあふぎ來し十と
せの光天(あめ)にいなすか

師の御病あつかりしころ

朝霜をふみてとひ來し師の門や御咳(みせき)
のこゑの今朝はきこえぬ

御寢いきに夜は沈みゆく病の間(ま)涙と
すればわが頬ながる

友の愛兒のいわけなきが、母に

わかれて程なくうせたるに

母にそひて菫摘みつゝゆく稚兒(ちご)の天
の花野にはや現ずらむ

紅葉山人の訃に接したるころ

詩の帝きみをまねくとよそはせし秋
の御輦(みくるま)あゝうつくしき

さる國手を悼みて

弱き身の十年は君によりて來つのこ
るいくとせあゝ誰の手に
夢ならばさめよと思ふもうつゝなや
今鳴りわたる鐘のさやけき（葬儀の日、寺院にて）

祖母君を悲みて

沈む日の光さびたるまなざしやいま
はの君に掌を合させぬ
御手かけむ肩もなくして夕野路に召
すべきわれを尋ねまさずや
後のことおぼし惱むか夢のうちに見
えし御影の憂はしかりき

祖母君の初七日の朝、ふと墓畔に
秋海棠の微風にそよぐを見て

わが書きし墓標の文字のにじみより
秋海棠は咲きかたぶれし

師が一めぐりの御忌にあたれる
朝、御墓にて

榊葉にうすうのこれる初雪よあはれ
と賜びし御歌かたれな

なにならぬ物の響も御叱りのみこゑ
とのみにかしこまりぬる

おもひで

こゝには、むねと、ふりし調のを收め
つ。さるは、過ぎしおもひでの、われに
はなつかしきふしおほくて。

わが名をば病の文字におもひいづと
いひしかの友今世にあらず

清水わく古井のあたりおもしろし清
しうつくし春のわか草

日あたりの縁にならべぬ鉢植のうる
しの紅葉しら菊の花

一もとの枯野の末の椎の木に小鳥む
れゐる霜白き朝

晝顔のうなだれてさく野の小道小道
うねうね君が家見えず

春の愁ひ秘めたる絃のあやしくも君
がみ歌にふれてさゝ鳴る

ふたつ三つとびゆく鳥のかげ遠くタ
風わたるちはらかや原

江の北にあけの鐘鳴る去のゝめを落
ちくる雁のかげかすかなり

君ひとりまさぬばかりに都をばさび
しと思ひぬさくらさくころ

芭蕉葉にさはりし風の音たえてさび
し今宵は蟲の音もせぬ

朝顔のやつれてのこるやれ垣をふた
羽は鶏くゞりて出でぬ

うるはしうゆかしき笛の音をとめて
霧の夜川をたゞ下りゆく

春さむき溪の清水に黒髪をあらへる
人のかげほのじろし

うすがすむ片瀬腰越前にして小春の
いそべたゞ繪をおもふ

輪かざりのゆがみなほせる朝の門京
の繪師より繪はがきつきぬ

姫君はかるたの會にいでましして金屏
にうつる梅の影淡し

うせし師の住ましゝあとにふといで
ゝ知らぬ門松禮してすぎぬ

蕎麥の花さきつゞきたる畑中をかた
りつゝ來る人まづ畫なり

よそながら人の柩を門に倚りて見お
くる夕秋の風さむし

富士見ゆる海べの宿に繪師となりて
今日も水繪の筆とりくらす

高樓に風ふきみちてさらしたる書の
卷々みなひるがへる

おもひねの夢にのみ見し君が宿を今
たづねつと思ひしも夢

朝餌まちて籠の金絲雀こゑたてぬ朝

窓うたに思ひ倦みをれば

白き紅き牡丹さきたる後庭の花のそ

よぎの朝めざましき

麥酒くみて君と蕎麥くふ竹の緣ゆふ

風たちて青葉みなうごく

薔薇の香のたかきにまどひゆくりな

くさめし霎時は夢としもあらず

歌よみの禪師とふべく今宵また木ぶ

かき山をみ寺のかたへ

紅梅の花ちりかゝる森かげのをぐら

き水に鶯鳥うかべり

神垣に梅さきみてるおぼろ夜を牛の
背の人おとゞに似たり（菅公）

一むらの白き桃さく門をいでゝ坂路
おりくる人おぼえあり

梅さむき杉田の里のありあけに春の
潮のゆるうさしくる

丁子おほきうらの花園香にみちてぬ

るき夜風の袖にえならぬ

かへりみ

人よ、わがこゝろ弱きをゆるし
たまへ。こゝにも舊調のすてが
たきを收めつる。

灯(ひ)ともりし岡の小家のともすればか
へりみらるゝ夕月夜かな

春の夜を葡萄の酒の香に醉ひてわか
き繪だくみ畫(ゑ)を說きてやまず

赤蜻蛉ゆふ日にむるゝ寺の門にやせ
し法師の落葉はく見ゆ

朝風にゆかたふかせてあけはなつ山
窓蟬の迷ひ入りたる

都いでゝたゞ見るものは山と水興は

すゝみて歌のおくるゝ

南むきの茶室の前にひともとの丁子

かをりて春の日ぬくき

岡の上に年の初日をわが待てばこゝ

にかしこに鷄のこゑ

黄なる菊白き菊もつ童子ふたり野べ

のさぎりにうすれてきえぬ

枯蓮にうすれし夕日かげきえて水音

さむく鴨ふたつ飛ぶ

小春日を山おりくれば鵯(ひよ)なきてふも

との川にわたし舟ゆく

ふきあれしよべの西風をさまりてや
れし芭蕉に霜うすく見ゆ

鳥のかげ窓にうつろふ小春日を木の
實こぼるゝおとゑづかなり

うねうねとめぐれる野徑(みち)たそがれて
夕月ほそしつゆ草の花

一むらの芙蓉の花に風見えて寺の朝
庭ひよ鳥のこゑ

露おもき秋海棠を眺めつゝよべ見し
夢のなごりをぞおもふ

秋風にふかれふかれてひとつ二つさ
きし朝顔花のちひさき

枕べのともし火きえて手さぐりに藥
のむ夜のさびしくもあるか

いくたびかつけて見たれどなき人の
形見の衣の身にあはざりし

妹のいけし牡丹にくれなゐの燭てり
はえて春の夜ふけぬ

三たびまで蓮さく池をめぐれども佛
にあはずありあけの月

野分やみて荒れに荒れたる花園の花
にさびしき秋の日の影

芙蓉剪る人のたもとの寒げなりあさ
露しげき庭の花畑

ゆふげをへてゆふべ欄による雨あがり青葉がくれの瀧の音たかき

花のころをかしこし母のおくつきに樒の枯葉みだれ亂れたり

皷の音ちかくきこえて上根岸杉のあら垣花ちりかゝる

小紅集

武山英子作

色あせて、はや萎れはてむ小草なればと、妹のせちにいなめるを、強ひて抜きあつめたる一束ふた束を、小紅集とおふせつ今めきて、あてに華やかならねど、あえかにやさしき調のうれしくて。

薫園

小紅集

武山英子

寵さめて凭るにさびしき朝の窓何の傲りぞ緋牡丹の花

幣を手に雁を見おくる人わかし加茂のやしろの秋の夕ぐれ

朝の日のとゞかずなりし山の裾につ
めたげに咲く野菊二もと

そゝろにも母の御姿のばれてわが
うつし繪のわれと戀しき

さくら木と彫りたる墓の苔の上に花
の香さむう紅流す雨（名妓さくら木の墓にて）

こぼれたる椿の花のとゞろきに殿の
ひゝなの冠てけたり

名に高きむすめとつぎて油屋の暖簾
さびしき春の雨かな

梅かをる古廟の丘のうす月夜驢馬に
またがる人の影あり

卯の花の雨にやつれし朝の窓寫しさ
したる御經うつさむ

眉白きおきなが磨く紅玉に坐右のつ
ばきに春の灯はゆる

わかき御手に念珠くりつゝ後の御名
君唱へむに惑ひまさずや（母にわかれし人の許に）

うるはしき花環花環の色あせて小さ
き墓の名雨にやつれし

御佛にてよひ滿願のいのりはてゝそ
ゞろうれしき望の月見る

よべの夢の跡をたどりて梅さける岡
にのぼればあけの鐘鳴る

はしちかく檜扇のかげほのめきぬ紅

梅殿の春の夜の月

女房の朝げはひするまる窓に紅梅の

かげうぐひすの影

萩すゝき桔梗かるかや藤袴みなたけ

のびてうらがれにけり（秋の末、百花園にて）

みあかしにみ油つぎて讀みさせる御

經また讀む御佛の前

見失ひぬ又見うしなひぬ百合の香の

高き園生のをさな人影（梶田ぬしのをさな君を悼みて）

年ごろをわがあこがれし繪の人のす

みれとなりし春の夜の夢

蔦もみぢ色にいでそめて竹垣のゆひ
めくるひぬ霜白き朝

はしちかく針の手とめて仰ぎ見ぬこ
のタぐれのはつ雁のこゑ

うぶすなの森の椎の實こぼれそめて
隣の稚兒の疎くなりぬる

新しきめをと棲みたる宿は荒れてさ
びしく立てり二もとの松

賜りし御題にえたるうたの興流るゝ
星にふとみだれたり

蓮池の浮葉のひまにかげ見えて七日
あまりの夏の月涼し

ものゝけの襲ひは夢か宿直する女御
のおとゞの夜はふけにけり

蚊やり火のけぶりにくもる行燈の火
影に白しふみを讀む人

見かへれば香の煙のほのかにて手む
けの花に風そよぐなり（母の御墓に詣でゝ）

時めきしうたひめ老いてわび居する

垣根にさけり露草の花

几帳たれて中宮こもる里内裏ものお
もはせの秋の雨ふる

○

みほとけの御像千體繪におして君が
後世祈むともし火の前

ひとゝせをぬし失ひし白後歯つけて
歩むに足おもき秋（二首、祖母君の一めぐりの御忌に）

――をはり――

明治三十八年三月十七日印刷
明治三十八年三月二十日發行
（定價二十五錢）

著作者　金子雄太郎

發行者　中根駒十郎
東京市牛込區新小川町一丁目十三番地

印刷者　山口竹二郎
東京市京橋區宗十郎町十五番地

合資會社東京國文社印刷

發行所　東京牛込區新小川町一丁目十三番地　新潮社

複製を許さず

銀鈴

文學士　尾上柴舟君著

（三版）　本文色刷、長方形頗美本
定價貳拾五錢　郵稅貳錢

新派歌集

▲聲調穩愜にして情韻雙佳、中に高渾の氣力あるものは尾上柴舟氏の作也。▲西詩の眞髓に徹して直ちに其清新の趣味を融會し得るものは、今の歌人中只一人の柴舟氏あるのみ。▲柴舟氏の作は眞に是れ崑山の珠玉、片々尙ほ尙ぶ可し。『銀鈴』は其會心の短歌數百首に添ふるに、獨創の四行詩と、流麗稀に看るの新體詩約十篇を以てせるもの、▲啻に新派和歌の硏鑽に從ふ人のみならず、一般文藝に興味を有する人の絕好侶伴也。

『銀鈴』批評一斑

▲温雅流麗の格調を有するは、柴舟の詩也。『銀鈴』は彼が得意の短歌新體詩を輯めたるもの、何れも再錦に値すべし。……（萬朝報）
▲雄渾なるもの、清華なるもの、豪放なるもの、高雅なるもの、恣態此一卷に錯綜して、趣味頗る饒かなり。……（讀賣新聞）
▲柴舟氏の歌は常に清鮮の趣に富む、若綠葉の露滴る森の曙の如しとや云はむ。敢て好詩集として世に推薦す……（帝國文學）
▲銀鈴と云ふ表題最もよく此書の內容を現はしたり其聲調の嶄新にして着想の奇拔なる方今稀に見るの良詩集なり……（女學世界）
▲氏の詩實に可憐、靜孱、たとへば風蘭の風なきにゆるゝが如し、『銀鈴』の名蓋し其詩をあらはして餘すなし……（白百合）
▲さすがに古歌に通曉せる著者のことゝて、其の詠檃ね佳なるは固より、最も摯實の氣に富めるは嬉し……（活動の日本）
▲柴舟氏の作、穩健にして清新、流暢にして華麗、その用語の自在にして斧削の痕跡をとどめざるは、今の歌壇、多くその比を見ざる所也。……（國文學）
▲聲調流麗にして軟弱に流れざるは推稱に値すと云ふべし、卷中最も見るべきは戰爭を詩題とせるもの也。……（電報新聞）
▲著者の和歌は世已に定評あり新體詩亦輕妙也、朗々これを誦せんには銀鈴の鏘然たる響を自ら聞かん。……（京都日出新聞）
▲西歐の新趣味あつて而も敢へて氣取らず高ぶらず著者の氣品高きを見る…正しく和歌壇上美しく咲ける一本の名花に譬ふべし……（中央公論）
▲この御集を拜見して、ます〳〵いちはやに進み給へる君のわれらが爲に示し給へるたふとき道の栞とありがたく忝く存じ候。（明星）
▲此一卷は歌集中最も價値ある者にして近時文藝界の珍也、年少和歌に志ある人は就て學ぶべし銀鈴は容易に得難き模範也。……（國民中學會講義錄）

幻影

萬朝報記者　田口掬汀君著

（再版出來）　紙數三百頁餘　定價四拾錢　體裁最も優美　郵稅金六錢

▲近時小說家として聲名嘖々たる掬汀君の短篇小說集也。何れも構想純潔、着想清新の佳作。いかなる人も之を讀んで興趣を感ずべし

▲幻影は小說の外、著者苦心の餘になれる美文、寫生文、評論文を輯めたる大文集也。新時代の文章を學ぶ人には、眞に絕好の模範也

本書の價値は左の批評に看よ、今回再版印刷出來せり。

◎電報新聞評

幻影は主として短篇小說を輯めたるもの也、短篇と云ふと雖も、いづれも三十頁に近きものにて、著者苦心の餘に成れるものゝ如し。著者の作の特色とする所は、道德美を描いて興趣湧くが如きに在り。本書は、熱烈なる戀愛を寫せるもの、青年の不撓不屈の意氣を描けるもの、平和なる村夫子を主人公にせるもの等、各編皆純潔にして清新、本書も亦よく家庭小說として江湖の歡迎を受くることを得ん乎。附錄、美文、寫生文、皆著者得意の蕭散且つ洒脫の文字也。評論文の精嚴にして縱橫なる、論文家としての著者の面目を窺ふことを得べし

◎報知新聞評

掬汀子が作の短篇小說、片瀨川、まぼろし、密獵船、島の先生、小車草紙、漁村の騷動等雜文孤棲雜記及び評論文數十篇を合刷して一冊とせしもの、例のイヤミなきスラリとした間に氣力あり韻致ある筆、これを讀みて感興多し、附錄のもでる論食堂論など常識より成る意見ながらどこか奇警に讀るゝところ著者が想と筆の清新に據る

◎毎日新聞評

田口掬汀子の小說、美文、評論を集めて一卷となしたるものなり、收むる所「片瀨川」の趣味多き「まぼろし」の美しき、「密獵船」の壯快なる、「孤棲雜記」の長閑なる、其の評論には美術論あり、文藝論あり、演劇改良論ありて、偶以て著者の多方面を見るに足れり、

◎神戸新聞評

三百餘頁の中趣味汪溢讀んで面白からざるはなく、一度卷を繙けば春風駘蕩の裡にあるやうである。要するに掬汀子は教訓的小說を描いて、成功の途に近づいたものと言はねばならぬ。而して氏の文章の穩健で、形容に巧みなるは、世既に定評あれば、今更言ふまでもない。特に本書の表紙の脫俗なるは、吾人の多とする所である。

◎中國民報評

氏が清絕双びなき筆になれる作を集めたるもの、小說あり論文あり

ゲエテの詩

文學士　橋本青雨君著

▲ゲエテの詩は作らずして成れる自然の聲にして、自ら云へるが如く、悉く其生涯の懺悔也。是れ彼が世界の詩人たる所以にして、亦全人類の豫言者たる所以也▲其詩流麗にして雄渾、中に戀を描き愛を謳へるものは、其情、熱烈清醇、一唱直に心奥に徹するものあり▲已にゲエテの詩は懺悔也、故に其成因を知らずしては未だ全く彼の詩を解せりと言ふべからず、今其傑作數十篇を採り、且つ反譯し且つ其成因を詳記す、加ふるに原文と其詳解とを以てしたれば、一は以てゲエテが詩的生活を洞見すべく、一は以て直に原文に就き天來の詩味を掬するを得む。▲青春の情熱に悶ゆる人は乞ふ春風窓下に之を繙け……（目下印刷中）……

文學雜誌

新潮

第二卷 第壹號

一月十日發行

毎月一回十日發行
定價拾貳錢郵税一錢
六冊郵税共七拾貳錢
郵券代用一割增の事

▲『新潮』は、伊藤銀月、田口掬汀、金子薫園、松居松葉、佐藤紅綠登阪北嶺、佐藤橘香の諸氏主として筆を執らるゝ文學雜誌なり。

▲『新潮』の掲ぐる所は、熱烈奔放、直論諱むなき評論及び人物月旦、情趣饒かなる小説、美文、韻文。奇警人の意表に出づる雜錄等也。

▲『新潮』は紙面の大半を開放して青年文士の馳騁に任す、評論、小説、美文皆可、和歌また最も歡迎する所也、乞ふ奮うて寄稿あれ。

▲『新潮』の短歌は、新派歌壇の雄鎭金子薫園子選評に當られ、現時韻文界の一勢力たらんとす。『銀鈴』の著者又毎號新作を寄せらる。

金子薫園君著

和歌作法

目下印刷中

和歌の作法を說ける者なきに非ざるも、多くは歌人以外の人の筆になれるものゝみ也。文章の事は文章家に問ふ可し、和歌は專門歌人の訓ふる所に待たざるべからず。薫園子は新派歌壇の重鎭也。其作、詩彩高麗、秀艶花の如し。人皆諷誦して萬斛の奇香に醉ふ。こゝに十年の蘊蓄を洩らして、年初和歌に志ある人の爲めに『和歌作法』に筆を執らる。所說懇切、行文平易、何人と雖も讀んで斯道に入るの楷梯となし得べし。

牛込區新小川町一丁目
新潮社發行